

33 アートの会 12月度 鑑賞会 報告

日時；12月17日 水曜日 10:00 から 13:10

場所；神戸市立博物館

参加者；小林猛、塩路夫妻、庄司、高濱、辻井、永井、榎本、光長、山川恵子、山崎、岡田、田中、天王寺谷、稻垣、吉田、安居院夫妻（記） 計 18名



大ゴッホ展 鑑賞会

今回は、第一期としてオランダからアルル時代までの作品を見る。そして 2027 年に開催する第 2 期では、《アルルの跳ね橋》《夜のプロヴァンスの田舎道》などが来日し、アルルから晩年までの画業後半が見られる。

まずは、会場が満員の大盛況であったことに吃驚。10:00 前についてみると、チケットを購入する人で外まで行列ができていた。中に入っても人が多く、2 階から 3 階の入り口に入るのも入場制限があってゆっくりとしか進めない状況。ゴッホ人気のすごさを知ることになった。

3 階の会場に入場すると、最初の第一章では、バルビゾン派やハーグ派の作品が並んでいた。ゴッホは 1881 年以降に本格的に画家を目指すようになると、農村生活を主題としたバルビゾン派の巨匠ジャン＝フランソワ・ミレーの作品に強い憧れを抱いた。また、ヨーゼフ・イスラエルスなど当時ハーグで活躍していた画家たちからも刺激を受ける。

いずれも暗い色調の作品が多く、あまり馴染めない作品ばかりであった。

次に、第二章ではオランダ時代の作品

1881年、ゴッホはハーグ派の画家のひとりアントン・マウフェの指導のもと、油彩画と水彩画の手ほどきを受ける。一方で、当時の社会問題に深く関心を寄せたファン・ゴッホは、街の景観や労働に勤しむ人々などを主題に素描を繰り返すことで、画家としての技量を自ら培った。1884年からはオランダ南部のニューネンで、農民たちと身近に接しながら、その実直な姿を題材に群像表現の大作に挑む。この章ではハーグでの油彩画や素描、ニューネンでの習作群を展示し、経済的な苦境や周囲との軋轢をのりこえつつ模索を続けた、ファン・ゴッホの初期の創作をみる。

『麦わら帽子のある静物』では、麦わら帽子を中心に陶器が並んでいる。写実的で画学生の描いた作品のように見える。光沢の表し方は、良かった。

『第九の仕事場と洗濯場』これは、暗い色調ではなく鉛筆と黒チョーク、黒ペンと筆、茶色の淡彩で描かれている親しみやすい絵柄であった。人物も描かれ平和な気持ちになる絵だった。

『白い帽子をかぶった女の頭部』は、ジャガイモの絵の登場人物である。油彩になると、どうしてこうも重いタッチになるのだろう。

第3章 パリの作家とファン・ゴッホ

ここでは、ゴッホも見ていたであろう印象派の画家たちの絵が飾られていた。

『カフェにて』は、これぞオーギュスト・ルノアールとすぐにわかる作品だった。とても小さな作品であったが、温かさを感じることができた。

『モネのアトリエ舟』クロード・モネ自らが描いた作品。セーヌ川の景色を描くために用意した船のアトリエである。貧乏なモネがどうしてこんな高価なものを持っていたのか不思議に思える。印象派の仲間たちと共同で保有していたのかと思う。

『虹、ポントワーズ』カミーユ・ピサロの作品。小品だが草原に虹がかかっている絵。このような絵が、当時のブルジョワに好まれたのだと思う。

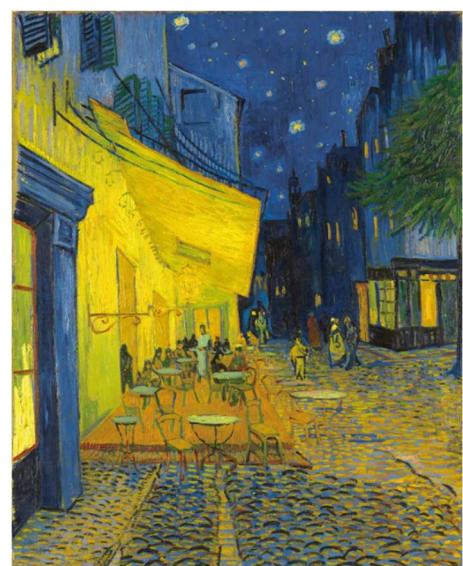
『パリー一帯、モンマルトルからの眺め』マクシミリアン・リュスという初めて聞く名前だったが、まだまだ森のままであったモンマルトルから北側、サン=ドニ方面を望んだ絵である。畑の中に工場が経つつあることがよくわかる、時代の変わり目だったのだ。

第五章 アルル時代

会場では、ここから『夜のカフェテラス』の部屋に入るのだが、一旦2階の入り口付近まで戻り、長い列に並んだ。

絵を目の前で見るには、ここに並ばねばならないのだった。

15分ぐらい並んで絵の前へ、写真を撮って良いとのことだったが、正面では一枚だけ取ってすぐに移動せよとのこと、ゆっくりと鑑賞できなかった。そこで、すべての作品を見終わった後に鑑賞スペースへ戻り、もう一度じっくり観察することができた。目の前を写真を撮っては移動する人たちがいたが、結構人の間が



あって、案外ゆったりとみることができた。これなら、最初から並ばなくても良かったのだ。じっくり見てみると、あの背景の青い空も一様ではないことが分かった。そして、なぜか石畳に割くスペースが手前に大きくとってあり、それが、星空よりも広いことに、何か意味があるのではないかと思った。手前が「今」、カフェの「俗」そして星空の「聖」。ゴッホは、「私は、“聖”も、“俗”もある混沌とした現在、今、ここに生きているのだ。」と言っているのだろう。

第4章 パリ時代

1885年に父が亡くなったことをきっかけに、ベルギーのアントワープを経て、パリに住む弟テオをたずねてやってきたのは1886年の2月。ファン・ゴッホは、風景画や、静物画、そして自画像で配色や筆致の試行を続けた。やがて、印象派や新印象派など、パリの前衛的な表現から触発されて、明るい色彩と闊達な筆致を駆使するとともに、他の画家には見られない独自の感覚も示すようになる。ここでは、約2年間のパリ時代で劇的に変化した、ファン・ゴッホの絵画表現の変遷をたどる。

『モンマルトルの丘』あまり生氣を感じることができない絵だった。廃屋のような家が連なり、風車が三つ並んでいる。雲の様子も雨が降りそうであるし、とにかく元気が出ない絵である。

『自画像』これは、美しい。ブルーが基調で統一感がある。偏屈そうなゴッホがよくあらわされていると思う。写真を撮ることができた。

『石膏像のある静物』画家の修行に欠かせないのが石膏像である。何べんも描いたのであろう。でも、この絵の良さが分からぬ。

写真を撮って良いことになっていたが、この絵を何辺も観たいという気にはならない。

色彩の選び方は良いと思うが、花にはリアリティがない。また、何を訴えているのかもわからない。

『野牡丹とばらのある静物』右図

この絵の方が、日本人にはグッとくる。

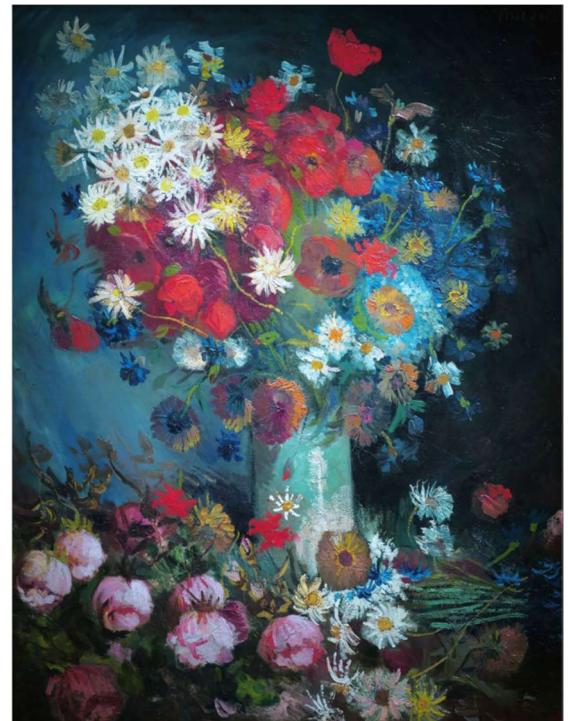
日本画でも、白の胡粉を使うと、そこが盛り上がって見える。その効果をこの絵でも感じる。

白が迫ってくるこの絵は、とても分かりやすくて良い絵だと思った。花瓶の横にも描いたのは、サービス精神か。あふれる花たち。ゴッホらしくはないが、素敵な絵だ。

11時半に出口に集合して記念撮影。塩路さんに感謝。

歩いて、東遊園地内の「ヴィラ・ブランシェ」へ

フルコースのランチ（3,300円）を食べながら、談笑。皆様と、とても豊かな時間が過ごせた。



以上